

2021年8月29日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 146 : 1～10

ルカによる福音書 17 : 20、21

「神の国はいつ、どこに」

<期待と憧れ？>

「神の国」。その響きは、わたしたちに期待と憧れを抱かせるように思います。今、置かれている現状が、苦しくて、先が見えなくて、困難であればあるほど。弱さや、無力さに打ちめられていればいるほど。わたしたちは「神の国」にすべての解決があり、この苦しみからの脱出の道があり、平和と、自由と、穏やかさが待っているに違いない。そんな理想を抱いて、その日を待ちわびるようになるのかも知れません。

イエスさまの時代のユダヤ人たちも、期待を持って「神の国」を待ち望んでいました。

ユダヤ人は、神さまに選ばれた民、イスラエルの子孫たちです。イスラエルの民は、エジプトの奴隷の中から導き出され、救い出され、神の民として歩むという、他の民にはない、特別な恵みに与っていました。

しかし、やがてイスラエル王国は分裂し、敵に滅ぼされ、捕囚に遭い、イエスさまの時代には国を失って、ローマ帝国の支配下に置かれていました。ローマ皇帝の強大な権力、軍事力、繁栄の支配のもとで、当時のユダヤ人たちは生きていたのです。

それで彼らは、神の国、つまり神のご支配は、この世においてまだ実現しておらず、やがて来たるべき時にメシアが現れ、敵を滅ぼして下さる。そして、再び神のご支配の下で、イスラエルの王国が建て直される。そう期待して、神の国が来る日を待ち望んでいたのです。

今日の 20 節にあったような質問は、このような背景の中で投げかけられました。その質問は、ユダヤ人の中でも、特に厳格に神の律法を守っているファリサイ派の人々からのものでした。彼らは、イエスさまに尋ねました。「神の国はいつ来るのか。」

この「神の国はいつ来るのか」ということは、西暦何年何月何日、ということを知ろうとしているわけではありません。神の国が来る前兆、それが来る時に、来たと言うことが分かるような「しるし」。それがどのようなものを教えて欲しい、ということなのです。

<見える形では来ない>

これに対してイエスさまは、こうお答えになりました。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

まずイエスさまは、「神の国は、見える形では来ない」と言われました。これはつまり、

わたしたち人間がそれを見つけて分かるような「しるし」があるわけではない、ということです。「ここにある」「あそこにある」というものでもない。目で見て、判断して、知ることが出来るものではない。神の国、神のご支配は、人間がそうやって把握できるもの、把握しようとするべきものではない、と言われたのです。

しかしそもそも、人は何故、「しるし」によって、神の国が来る予定を知りたがるのでしょうか。もし、明日来ると言われたら、焦ったりするのでしょうか。もし百年後だったら、気を緩めても良いのでしょうか。

わたしたちは先の予定が分かれば、それに向けて心の準備をしたり、自分の行動をコントロールしたいと思います。そうすれば、失敗を避けることが出来るし、慌てなくても良いし、安心することが出来るからです。

特にファリサイ派の人々は、神の律法を厳格に守り、また自分が神の民であるという誇りを持っていました。

彼らがもし、神の国が来る前兆を知ることが出来るならば、神の国が来る前に、心の準備や、自分の信仰の歩みを整えることが出来る、と考えるかも知れません。予定が分かれば、準備が出来ます。それまでになすべきことをし、神のご支配が始まる時には、すべてを完璧に整えて、神さまの御前に出よう。そんな思いなのかも知れません。

彼らの期待によれば、神の国が来たならば、神の民は、今の理不尽で悲惨な状況から解放され、いよいよ自分たちの天下となるのです。今は、神の民でもないローマ人、罪人である異邦人に支配されて、肩身の狭い思いをしているが、いよいよ神が支配して下さる時になったら、そのような異邦人は蹴散らされ、敵は滅ぼされる。そして、神の律法に忠実であった自分たちは、大いなる祝福を受けるに違いない。だから、神の国が近づいたら、いよいよ厳しく律法を守り、異邦人を遠ざけ、罪人を排除し、神の民たる備えをしなければならないのだ。そう考えていたかも知れません。

でも、イエスさまは、そのような考えを否定なさったのです。

神の国は、神さまの定められた時に、神さまの力によって、神さまが実現なさることです。人間の予定に合わせて、人間の願いに沿って、人間の思う仕方で実現するのではないのです。

神さまの予定を、人間が把握しようとする。自分の予定の中に組み入れて、その出来事を把握し、自分の思い通りに準備をし、コントロールしようとする。それは、神さまに対して、とても不遜で、傲慢なことだと言えるでしょう。

先の予定を知って安心することは、つまり自分の思い通りに事が運んでいくこと、自分が今後の展開を理解し、把握し、逆算して自分の力で備えることが出来る故の安心です。

しかしそれは、自分でその時までにはどうにかしたいとの思いであり、神さまに信頼し、神さまご自身に安心を見出すものではありません。もし、神の国が来る時を知り、それによって自分がどうしようという思いがあるならば、それは、神さまに自分自身を委ねきって歩むことから、ほど遠い歩みなのではないでしょうか。

<神の国はあなたがたの間に>

さて、神の国について、イエスさまはこのように言われました。

「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

イエスさまは、今すでに、神の国はあなたがたの間にあるのだ、と言われました。神の国は、もうある。神の支配は、すでにあなたがたの間にある、と言うのです。

それは、どういう意味なのでしょう。

かつて聖書の口語訳では、「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」と訳されていました。新しい聖書協会共同訳では、「実に、神の国はあなたがたの中にあるからだ」と訳しています。これは、教会の歴史の中で、神の国は、あなたがたの心の中にある、心の内側にある、という意味で捉えられたこともあります。

しかし、神の国、神の支配は、そのような精神的、内面的なことではないのです。神の国は、神の力によってもたらされるもの、つまり、神の支配は、外から来るものだからです。

では、「神の国はあなたがたの間にある」とはどういうことなのでしょう。

イエスさまがこれを語っておられる時、「あなたがた」と言っておられるのは、ファリサイ派の人々のことです。では、そのファリサイ派の人々の間にあるのは何か。彼らの間に立っているのは誰か。それは、イエスさまご自身です。

イエスさまはここでファリサイ派の人々に、「今、あなたたちの間に立っているわたし。あなたの目の前にいるこのわたしが、神の国なのだ。わたしにおいて、神の支配は実現しているのだ。」そう語られたのです。

<神の国の実現>

イエスさまが、伝道を始められるにあたって最初に語られたのは、マルコによる福音書の1:14の御言葉です。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

イエスさまは世に來られて、いよいよ、十字架の死と復活へ向かって歩み出されるのです。その時が満ちた。救いを実現する時が来た。神の国は、神の支配は、ここに始まる。だから、この知らせを信じて、受け入れて、神さまの御許に立ち帰りなさい。

これが、イエスさまが最初に告げられたことです。このイエスさまご自身によってこそ、神の恵みのご支配は打ち立てられていくのです。

ルカによる福音書4:16以下にも、イエスさまが、ご自分こそが聖書の救いを実現するお方であると示された箇所がありました。

イエスさまは、安息日に会堂でイザヤ書を朗読なさいました。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

そして言われたのです。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」。今この時、この聖書に預言されていた神の恵みは実現した。わたしが、これを実現する者だからだ。イエスさまはそう仰ったのです。

事実、イエスさまは罪に捕らわれている人を解放し、目の見ない人を見えるようにし、病にある人を癒し、悪霊に取りつかれている人を自由になさいました。これは、神の恵みのご支配が確かに実現し、始まっていることの確かな「しるし」なのです。

そうです。まさに、神の国の唯一無二の「しるし」は、このイエスさまご自身です。神の御子が遣わされ、地上に来られ、福音を告げ、御業を行なっておられます。神さまに立ち帰るようにと、神さまの赦しと恵みを受け取るようにと、招いておられます。

そして、この神の支配は、イエスさまの十字架において罪が滅ぼされ、復活において死に勝利されることで、この地上に、決定的に打ち立てられたのです。イエスさまがおられるところに、わたしたちすべての人間を、罪と死の支配から解放する、神の恵みのご支配が実現しているのです。

…しかし、ファリサイ派の人々は、今、すぐ目の前におられる、唯一の、真の「しるし」を拒否しています。彼らは気に入らないのです。

イエスさまは、罪人と仲良くしておられます。イエスさまは、汚れた者にも躊躇なく声をかけ、触れられます。イエスさまは、安息日の掟を破って、病人を癒されます。イエスさまは、異邦人にも祝福をお与えになります。

これらは、ファリサイ派の人々からしたら、神の民失格となることであり、とても受け入れられるものではありませんでした。

それに、イエスさまは、ファリサイ派の人々が、神の律法の根底にある、真の神さまの御心を理解していない、と激しく非難なさいました。自分たちの正しさに絶対的な自信があるファリサイ派の人々は、いつしかイエスさまに怒りを覚え、殺意を抱くまでになっていたのです。

もし、このイエスさまが神の国を実現なさるのだとしたら、それはファリサイ派の人々が願っている神の国ではありません。彼らが理想としている神の支配ではないのです。

この直前の箇所では、十人の重い皮膚病の人たちが、イエスさまにいやされ、清められたという出来事が語られていました。

しかし、その中でたった一人だけ、異邦人とされ、ユダヤ人から忌み嫌われていた一人のサマリア人だけが、イエスさまの許に帰って来て、賛美し、感謝してひれ伏し、神さまとのまことの交わりに与りました。この外国人だけが、「立ち上がって、行きなさい。あなたがの信仰が、あなたを救った」と、イエスさまの救いの宣言を聞き、その恵みに生きる者となりました。

このように、神さまのご計画は、ご自分が選ばれた神の民だけを救おうとされるものではありません。この神の民を通して、イスラエルの民を用いて、全世界の造られた人々を救う

ご計画をお持ちなのです。神さまの恵みを受け取り、応える者すべてに与えられる、神の国なのです。神さまの恵みのご支配は、神の民だけではなく、世界のすべての人々を、その懐に招き、包み込もうとしているのです。

その計画を実現するために。今ここに、あなたがたの間に、あなたの目の前に、わたしがいるのだ。神の国は、わたしにおいて、あなたがたの間に、すでに来ているのだ。

イエスさまは、そうおっしゃったのです。

そうであるならば、神の国は、いつ来るのか。どこに来るのか。その「しるし」はどんなものか。もう、そんなことを論じている場合ではありません。

神の国は、もう、来ているのです。イエスさまは、もう、わたしたちの間に立っておられるのです。そしてご自分の十字架と復活によって実現なさる救いへと、招いて下さっているのです。

それを聞いたなら、わたしたちがすべきことは、ただ一つ。悔い改めて、信じること。神さまが、イエスさまによって与えて下さる救いを、感謝して受け取り、イエスさまに従っていくこと。ただ、それだけなのです。

<今、恵みの現実に生きる>

そして、今この時、この現実の中で、わたしたちがイエスさまにあって、確かに神のご支配のもとにあると信じるのならば。わたしたちは、日々の中で抱えている悩みや苦しみ、困難が、自分を支配しているように思えても。人間の権力や力が、乱暴に支配しているように思えても。どのような時も、今この時も、自分が確かに神さまの恵みに支えられており、生かされており、愛の眼差しに包まれ、力強い御手に守られているのだ、ということを感じる事が出来るのです。このすべてをご支配なさる神さまの御手にこそ、寄り縋ることが出来るのです。

もし神の国が、自分の問題の解決や、自分の理想とする世界の実現だと思っているのなら、わたしたちは今この時も、「神の国は、いつ、どこに」と問わなければならないでしょう。こんな争いばかりの世界に、苦しみばかりの世の中に、神の支配など、神の国など、まだ存在していないではないか。そう言いたくなるでしょう。

そしてもし、まだ神の国は来ていない、わたしたちはまだ神のご支配の外にいる、というのなら。この苦しみの現実に、わたしたちは何の支えもなく、何の守りもなく、丸腰で対峙させられることになるのです。わたしたちはそれに耐えることは出来ないし、やがて絶望し、この世を厭い、嘆くことしか出来なくなるでしょう。

でも、そうではないのです。イエスさまが来られたことによって、神の国は来たのです。神の支配は、始まっているのです。神の国は、神さまがわたしたちの罪を赦し、わたしたちに永遠の命を与え、わたしたちをご自分の恵みの支配に生きる者とするために、この罪に満

ちた世界に愛する御子イエスさまを遣わして下さった。その時から、確かに、わたしたちの間に実現しているのです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。そうです。神さまは、世を、わたしたちを、愛しておられます。そして、救いの御手を伸ばし、イエスさまを遣わされ、この世界の中で、この歴史の中で生きて働かれ、救いを実現し、わたしたちを御許へ招いて下さっているのです。この神さまの愛に満ちたご支配が、イエスさまにおいて、わたしたちの間に、すでに実現し、すでにあるのです。

神と共にあること。それが、神の国であり、神の支配に生きることです。

それは、わたしたちの理想が実現することや、問題が解決することよりも、もっと大きく、もっと豊かなことなのです。

神の国がすでにあるのならば。たとえ、どんなに耐えられないと思うようなことに遭遇したとしても、わたしたちは、神さまの恵みと命に溢れた、救いのご計画の中にある、ということ。神さまの御手が、神さまのご支配が、神さまの愛と憐れみが、今、自分の上にあるということ。それを、わたしたちは、確かなこととして信じて良いのです。イエスさまがこの世に来られ、十字架に架かって死に、復活して下さったという確かな事実のゆえに、わたしたちは、これを信じて、これに頼って良いのです。

この恵みの只中に立ってこそ。神さまのご支配にあってこそ。わたしたちは、今神さまから与えられている場所にしっかりと立ち、神さまに与えられている命を、神さまに向かって、精一杯歩むことが出来るのです。

神の国が今、わたしたちの間にある、と信じることは、わたしたちのために、命さえ惜しまずに捨てて下さる、神の御子イエスさまが、共にいて下さるということを知ることです。

そしてそれは、この方が、わたしたちを決して見捨てずに、終わりの日まで、支え、守り、導いて下さるという確信を与えられることなのです。

神の国は、すでに実現しています。しかし、未だ完成はしていません。まだ、すべての者がこの神の国を受け入れてはいないからです。それは終わりの日、つまりイエスさまが再び来られる日に、神の国は誰の目にも明らかにされ、完成に至るでしょう。その時もまた、いつ来るかは分かりません。

でも、それで良いのです。わたしたちは、今、すでに神さまのご支配に生きているのであり、神さまがその恵みを完成させて下さるのですから。わたしたちは、安心して、すべてをお委ねして、いつイエスさまが再び来られても良いように、与えられた務めを、今この時、精一杯果たすのみなのです。そして来たるべき日には、他でもない、愛するイエスさまが来られるのですから、いつになったとしても、喜んでお迎えするのみなのです。

「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」神の国は来ています。イエスさまが、神のご支配を実現し、その恵みの中で、わたしたちを支え、守り、導き、完成へと至らせて下

さいます。わたしたちはそのことを信じつつ、委ねつつ、今日与えられたこの日を、今のこの時を、イエスさまと共に生きるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

神の国を、神の恵みのご支配を、イエスさまにおいて来たらせて下さり、わたしたちの上
に実現して下さいたことを感謝いたします。

日々の歩みの中、どのような困難な時にあっても、わたしたちは、十字架と復活のイエス
さまの恵みのご支配の中に置かれているということを、心に留めさせて下さい。

わたしたちの罪や弱さが、すぐにわたしたちの心と目を覆い、耳を塞ごうとします。しか
し、何にも増して確かである、神さまのご支配をこそ見定め、その恵みの現実にしっかりと
立って、生きる者とならせて下さい。

わたしたちに間にあり、共に歩んで下さるイエスさまが。すべての支配者となられたイエ
スさまが。わたしたちを守り、支え、終わりの日まで導いて下さり、来たるべき日に救いを
完成させて下さることを、信じさせて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン